



虹のかけ橋



第 37 号 / 平成 26 年 1 月

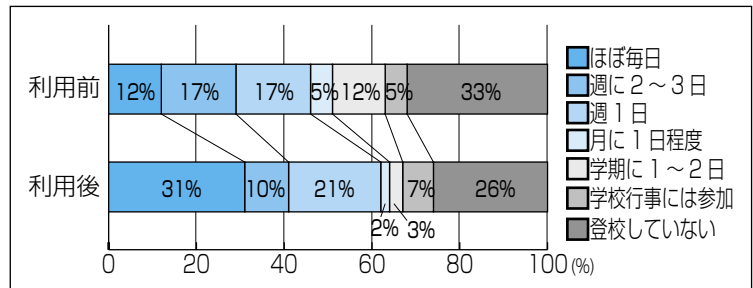
兵庫県立 但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

平成 24 年度利用者の追跡調査

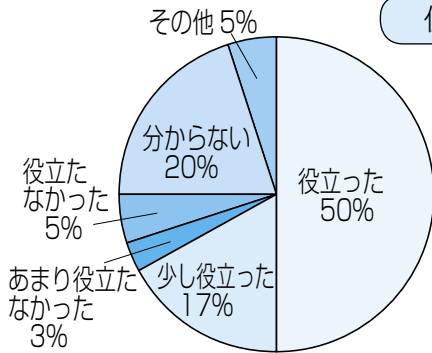
但馬やまびこの郷では、今後の取組等について改善を図るための資料とするため、平成 24 年度に当所を利用した児童生徒の保護者を対象に、利用後の児童生徒の登校状況や生活状況などについて追跡調査を実施いたしました。

登校状況の変化



当所利用前と利用後の登校状況を比較してみると、毎日登校する児童生徒の割合が大幅に増加しています。

また、個々に見ると 35.7% の児童生徒に登校状況の改善が見られました。特に何度か繰り返して利用している児童生徒は少しずつ登校日数が増加する傾向にあります。



但馬やまびこの郷の利用がお子さんの再登校に役に立ちましたか

67% の保護者が当所の利用が再登校に役立ったと回答しています。

児童生徒の変化では、「外出の回数が増えた」「家族との関係が良くなった」「学校との関係が良くなった」といった効果が顕著であり、人と関わることに改善が大きいと言えます。

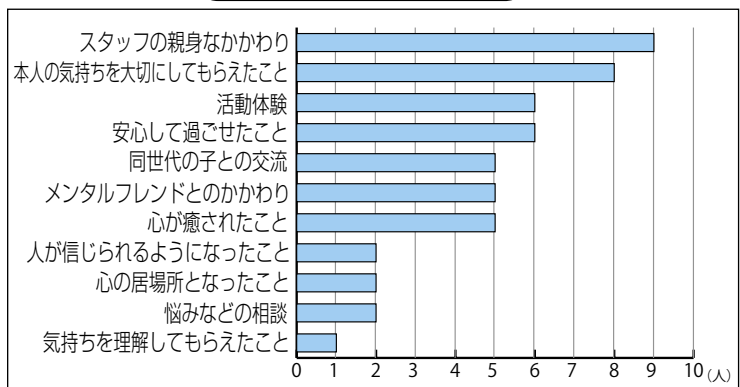
当所の宿泊体験活動を通じたスタッフや同世代の子どもたちとのつながりが再登校への大きなエネルギーになっていると言えるでしょう。

いじめ対策等生徒指導推進事業

本年度、但馬やまびこの郷では、文部科学省の委託事業である「いじめ対策等生徒指導推進事業」の一環として、当所を利用した児童生徒の保護者を対象にいじめに起因する不登校についてのアンケート調査を実施しました。

いじめを受けて登校できなかった時期に但馬やまびこの郷を利用した児童生徒の多くが、スタッフや同世代の子どもたち等、他者との関わりを求めており、その中で癒されたり、エネルギーを蓄えたりしていったことがアンケート結果からわかります。

改善に役立った取組



発達障害と問題行動（戦略的支援編）

大阪大学大学院、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学
連合小児発達学研究所 特任講師 **和久田 学**

はじめに

私たちは年に一回、成人病検診を受けます。これは深刻な成人病の兆候をとらえ、予防するという考えから行われており、この背景には病気の危険因子に関する研究があります。例えば「喫煙」が肺がんの危険因子であること、「高血圧」が脳血管疾患や心臓病の危険因子であることは有名です。

さて、子どもの問題行動は、どうでしょうか？「服装の乱れは心の乱れ」のように、経験的に問題行動の危険因子を表すような言葉がありますが、実はこうしたことについて、既に世界中で研究がなされています。



1 問題行動の危険因子

これまでの研究によると、幼児期の問題行動で思春期以降の非行、薬物乱用、暴力、犯罪などが予測できることが明らかにされています。アメリカのミシガン州では、25個の危険因子を抽出し、入学当初にそれらをチェックした上で、複数の危険因子のある子どもに対しては、予防的に支援を行うことがシステムとしてなされています。（表）

問題行動のある子どもの中には、虐待を受けた子どもが多数存在することがわかっていますが、そうした虐待の危険因子も既に明らかになっていて、例えば子どもの低体重出生、発達障害、親の精神疾患や偏った教育観、養育能力の不足、貧困、若年の出産、夫婦仲などが挙げられています。

残念なことに、発達障害は暴言暴力、不登校、精神疾患などの危険因子です。さらに他の危険因子も合わせて考えると、子どもと保護者の「孤立」や「スキルや知識の不足」が、様々な子どもの問題の根本的な課題であることが浮き上がってきます。ただ、これらは多数のデータを解析した上での確率としての危険因子であって、「そうした因子がある、イコール、問題を起こす」ではないことに注意をしなければなりません。極端な理解は「発達障害児は全員、問題行動を起こす」のような差別につながってしまいます。これらはあくまでも予防的支援につなげるための考え方です。

表：ミシガン州でリストアップされている子どもの問題行動の危険因子より抜粋
(Michigan State Great Start Program, 2009)

子どもの個人要因
栄養失調、低出生体重、障害（発達障害、知的障害、身体障害他）、慢性疾患（アレルギーを含む）、被虐待
保護者要因
無職、Single Parent、犯罪歴（投獄）、低学歴、若年出産、親及び兄弟の慢性疾患、薬物乱用（中毒）、外国人、粗暴、DV
家庭要因
低年収（貧困）、分離された住居（孤立）、兄弟の低学歴、親兄弟との死別、支援の欠乏、大家族

※これはアメリカでの取組であり、これらの危険因子をそのまま我が国のものとして使うことには限界があることに注意が必要

2 問題行動を予防する

不登校にしろ、校内での暴言暴力にしろ、問題が起きたときには、既に子どもも保護者も傷ついています。よって、問題行動の予防が大切になりますが、具体的には何をすればよいのでしょうか？

危険因子の考え方からすると、子どもと保護者の双方に対して、「孤立防止」「知識とスキルの獲得」を支援していくことが良いようです。

先生方が教室を見回した時、「孤立している子どもはいないか？」「スキル不足のために困っている子どもはいないか？」の2点でチェックします。同様に保護者の中で、地域社会、PTA から孤立している家庭、知識とスキル不足から間違った子育てをしている保護者を見つけます。すると、問題が顕在化する前に、何らかの予防的支援を行うことが可能になります。



3 具体的方法のヒント

ここでは「孤立防止」と「知識とスキルの獲得」の2つの予防的支援について、いくつかのヒントを提示することにしましょう。

① 孤立防止のために

「孤立」している（しがちな）子どもに対して、最初にすべきことは環境を整えることです。つまり、周りにその子を受け入れられるような子どもを配置し、一日のうち、一度で良いので、仲間との活動を保障します。また、何か問題があったらすぐに助けを求められるようなホットライン（日記、面談など）を用意することも重要です。また一人でいる子どもを積極的に仲間に入れるような学級づくりは、全ての子どものために有効であることは言うまでもありません。

② 知識とスキルの獲得のために

コミュニケーションや集団適応、行動や情緒のコントロールのスキルは、子どもの発達のために必要です。こうしたことが苦手な子ども（例えば発達障害）は、不登校をはじめとする問題行動を起こしやすくなります。しかし、こうしたスキルは一朝一夕で教えられることはありません。

よって、幼児期から戦略的、継続的にこうしたスキルを教えなければなりません。コミュニケーションや集団適応などは自然に身につく当たり前のことだ、と切り捨ててはいけません。当たり前のことこそ、丁寧に教えなければならないのです。

同時に保護者に対しても、子どもの発達のこと、子育てのやり方について、正しい情報を伝えていかなければなりません。PTA 講演会、保護者懇談会、学校便りなどを活用して、正しい情報を提供することが、予防につながります。

ま と め

今回は問題行動の支援を予防の観点から述べてみました。現在、子どもの問題行動にさらされている先生方からすると肩すかしの情報に思えたかもしれませんが、予防をしない限り、問題を起こす子どもは増える一方になってしまいます。

これまでの研究からわかっていること（根拠）に基づいて、子どもの問題に関する予防的支援および教育を考えることは、未来の教育をより良いものにするために必要な取組なのです。



不登校に関する研修会より

第3回

9/5(木) 県立総合体育館で、神戸松蔭女子学院大学の坂本真佐哉教授に「ブリーフセラピーに学ぶ相談活動のエッセンス」と題してお話をさせていただきました。



①思春期の心の問題について

「心の問題」は行動上の問題として現れるが、それに関連して精神医学的問題や心身医学的問題も起こる。学校でできることは、本人や家族を問題解決に向けて励ますこと、問題の見方と対応を校内で共有することである。情報共有の在り方は校内で統一しておくべきである。

②ブリーフセラピーや家族療法の考え方

子どもや保護者が問題を抱えたとき援助者は「励ます」「教える」「気付かせる」などを試みる。それで上手くいかないときは、解決をこちらから提供するのではなく、生徒および家族に教えてもらう。家族ごとに独自の文化があり、こちらの価値観が必ずしも通用するとは限らない。解決についての話し合いが、いつの間にかどちらが正しいのかという対立関係になってしまうのは避けたい。悩みというのは相対的なものなのでハッピーが増えれば悩みは減る。悩みを抱えている人は自信をなくしている状態なので、自信を回復させることによって自ずと解決につながる。



第4回

10/29(火) 県立淡路文化会館で、和歌山大学の武田鉄郎教授に「発達障害と不登校等の二次障害予防」と題してお話をさせていただきました。



①不登校という状態をどのように見ていくか

不登校をある一側面からだけ見るのではなく「背景疾患の診断」、「発達障害の診断」、「出現過程による下位分類」、「不登校の経過」、「環境」などの多軸評価で見ていくことが適切な支援につながる。

②発達障害の二次障害をどのように捉えるか

発達障害は、脳のレベルでは良くも悪くもならない。状態が悪くなるのは社会的環境の問題である。事実、二次障害としての不登校の問題が起こっているのは世界的に見てアジア圏だけである。発達障害の子どもは集団生活の中で「生きにくさ」を経験することが多い。二次障害としての不登校は、それまでの経過で出会った心的外傷経験や対人関係の結果である。子どものストレスを知り、取り除く方向で支援しなければ根本的な解決はない。そこで、「叱らないが譲らない」提案・交渉型指導法を提案したい。「なぜ出来ないの」ではなく「どうしたらできるの」と聞く。子どもの主体性や自主性を重んじ、その子どもに寄り添う状態で子どもに選択させるこの方法は、相手の本当のニーズが知れて子どものストレスが少ない。

『不登校に関する研修会』講師執筆おすすめ図書紹介

- ・吉田 圭吾 先生・・・教師のための教育相談の技術（金子書房）
 - ・坂本真佐哉 先生・・・心理療法テクニックのススメ（金子書房）
 - ・武田 鉄郎 先生・・・発達障害が引き起こす不登校へのケアとサポート（学研）
- それぞれの先生の講義のポイントが書かれています。参考にして下さい。



兵庫県立但馬やまびこの郷機関紙「虹のかけ橋」NO.37

●平成 26 年 1 月

●発行／兵庫県立但馬やまびこの郷

●〒669-5135 朝来市山東町森字向山 45-101 TEL (079) 676-4724 FAX (079) 676-4721

●URL <http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp>

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

25 教① 2 - 002 A 4